

メディアにおける当事者の匿名性に対する若い世代の意識 — 社会的困難な状況におかれた当事者の写真を対象として —

社会科教育講座 川瀬久美子

Consciousness in the young generation to “Tojisha” anonymity in media

Kumiko KAWASE

(平成 27 年 6 月 26 日受理)

抄録：メディアにおける当事者の匿名性に対する大学生の意識を自由記述から抽出して整理したところ、メディアに実名で取り上げられるか匿名で取り上げられるかについて、当事者が主体的に判断しているというイメージが持たれていることがわかった。情報の伝え手に対しては、実名の場合は情報の信頼性・信憑性に優れていると受け取られている。また、当事者に対して配慮しつつ、受け手をいかに惹きつけ記憶に残る情報伝達をするか工夫をこらすメディア像が大学生の中に認められる。受け手に対しては、実名のほうがリアリティを感じて感情移入がしやすく、共感が生まれやすいことがわかった。

キーワード：メディア (media)、当事者の匿名性 (“Tojisha” anonymity)、
若い世代の意識 (consciousness in the young generation)

1. はじめに

筆者の専門分野は自然地理学（地形学）であるが、教員養成系教育学部の社会科教室に在籍している関係で、着任以来 10 年以上、地誌学や地理教育に関連した授業も担当している。この間、以下の 2 点を強く意識するようになってきた。

一つは、遠く離れた地域が抱える課題に対して、大学生にどのように当事者性を意識させることができるかということである。地理学研究ではフィールドワークを重視し、積極的に様々な地理的事象を自分自身の目で観察し、現地の人々の生の声を収集する。そして、地理教育においても同様のことが推奨されている。現地調査の技能は、地図の読図や統計資料の分析などの地理的技能と同等に、地理学研究や地理学習にほとんど不可欠と言ってもよい。大学の授業においてもフィールドワークを設定し、できるだけ学生自身が現地観察や現地調査を行う機会をつくっている。そして、フィールド

ワークに参加した大学生からは「実際に見てみると教室の講義で説明されていることがうよく理解できた」「地域に暮らす人々の生の声を聞けて良かった」とフィールドワークの学習効果は高く評価されている。そうした声を聞いて、教員としてはフィールドワークの準備や指導の苦勞が報われたと嬉しい反面、ヒヤリとしたものが背筋を這う。すなわち、「自分の目で見て体験したことに優るものはない」ということは「実際に見たり体験できたりしないことにはなかなか理解も共感も生まれにくい」ということの裏返しを意味しないか、という危惧である。

例えば、日本および世界各地で様々な地域問題が発生しており、地誌学習の話題として取り上げることがある。地域問題を初めとする社会問題は直接の関係者（当事者）自身によって解決がはかられるが、問題が発生したり迅速に解決が進まないような社会的状況には、広い意味で私たち社会構成

員すべてが関わっている。したがって、私たち自身も間接的な当事者であるという“当事者性”の自覚や獲得が地域問題・社会問題の解決に不可欠である。しかし、「実際に見たり体験できたりしないことにはなかなか理解も共感も生まれにくい」としたら、ほとんどの地域問題・社会問題の解決に対して、当事者以外の人々からのサポート（支援）は期待できなくなる。

大学生が自分の日常から遠く離れた土地で起こる社会的問題について具体的イメージを持ち、できるだけ「今を生きる自分にも関わりのあること」と捉えられるようにするには、どうすれば良いのだろうか。筆者はその解決方法の一つとして、写真や動画や新聞記事など様々なメディアを通じた情報を活用している。しかし、当事者性の獲得にメディアを通じた情報の活用はどれほどの効果があるのだろうか。例えば、メディアの性質（写真・動画・音声・性質）は勿論であるが、社会的に困難で問題のある状況（地域問題や社会問題）の様子を「現象」として記録した情報と、その状況におかれた当事者個人を対象として記録した情報では、情報の受け手のその問題に対する理解や共感の生まれ方は異なっている可能性がある。

もうひとつは、大学生の授業におけるプレゼンテーションにおけるメディアの活用についてである。近年、大学教育ではアクティブラーニングが推奨され、個人またはグループで課題に取り組み、その成果を授業で報告する機会が多い。作業課題が調べ学習をベースにしたものであると、学生がまず頼るのはインターネットである。そのこと自体は必ずしも非難されるものではないが、中にはネット検索でヒットした文字資料（テキスト）と画像をプレゼンテーションソフトのスライドに貼り付けただけという報告もある。内容の理解も浅く表面的なイメージ先行のプレゼンテーションであることは容易に教員に看破されるが、それを指摘しても当該学生に批判が十分伝わったという手応えは少ない。このように今日の大学生は、事象の理解や説明にかなり安易に写真や動画を用いる傾向がある。「見たらわかるでしょう？」というわけである。確かに写真や動画の見る者に訴える視覚的効果は高く、私達のまわりには日常的に商業的・娯楽的なテレビやインターネットの画像に溢れている。しかし、膨大な画像が氾濫する今日、何をどのような状況や文脈で撮っているのかという撮影者（情報の伝え手）の狙いを、一つ一つの画像について思い巡らす機会は少ない。また、画像に撮られている景観

や人物についても、画像の背景やフレーム外に存在する「撮られなかった」現実や撮られた者の思いを情報の受け手の知識や感性で補完しながら“読み取る”努力をどれだけ私達はしているだろうか。

本稿は教育における社会問題の当事者性の獲得を問題意識としながら、社会問題の当事者を被写体とした写真の匿名性が大学生のような若い世代にどのように意識されるのか明らかにすることを試みたものである。地域問題・社会問題の当事者がメディアにおいて匿名で伝達される場合と実名で伝達される場合で、受け手の意識にどのような違いが生まれるのかについて、授業のワークシートにおける自由記述から考察した。当事者への意識およびその問題の受け止め方の違いは、その問題に対する受け手自身の当事者性の獲得に少なからぬ影響を与えていると推測される。

本研究の資料となるワークシートの自由記述は、大学の授業において教員が社会問題の当事者を被写体とした写真を提示し、その匿名性に関する論評を紹介した後に書かれている。授業の狙いは、さまざまなメディアを通して社会問題に関する情報を大衆に伝える「伝え手」と問題の「当事者」、そして情報の「受け手」である私達の意識や立場について自覚的に考えさせ、メディアを通じた情報の特性について熟考する機会を設けることである。自由記述は被写体の匿名性についていくらかの示唆を教員から与えた後に書かれたものであり、「一般的な大学生の意識の傾向」を把握するためにとられたアンケートではないことには留意してほしい。

2. 授業実践の概要

1) 授業の全体構成

実施した授業は現代社会を「メディア」を切り口に分析するというオムニバス授業「現代社会とメディア」の一つである。愛媛大学教育学部総合人間形成課程の2回生対象の選択必修科目である。平成25年度と平成26年度の履修登録は、それぞれ66人と51人であった。後述する自由記述の分析対象となったのは、平成25年度が60人、平成26年度が45人である。

筆者が担当した90分の授業3回の狙いや目標は以下の通りである。

<狙い>

社会的な困難に遭遇している人々の実態を映像に記録し社会に伝えようとした個人が、当事者とどのように関わりを持ち、

その過程で何が起こったのか検証する。社会問題へのアプローチとしての映像記録の力と、当事者と伝え手、そして私たち受け手の関わりについて考える。

<目標>

1. 映像記録による社会問題へのアプローチの例から、当事者の匿名性について自分の考えを述べることができる。
2. 社会問題を映像に記録し社会に伝えようとした個人が、何を考えて行動したのか考え、自分の意見を述べるができる。
3. メディア（情報の媒体・伝達方法）は多様であり、メディアの特性や情報を受け取るシチュエーションによって受け手に与えられるインパクトが異なることを体験する。

以上の狙いや目標に沿って、3回の授業が構成された。平成25年度と26年度では若干の提示資料の違いがあるが、3回の内容の概要は以下の通りである。

1回目：社会的に困難な状況に置かれた当事者を撮影した写真を全く説明無しに提示し、感じたこと・考えたことを自由記述させる。写真について解説した後、写真の匿名性に関する論評をいくつか紹介し、受講生自身はどのように考えるか、自由記述させる。

2回目：熊本県不知火海周辺で起こった水俣病事件について問題の経緯や概要を説明したのち、写真家や映像作家がどのように水俣病に近接していったのか、いくつか資料を提示する。その上で、伝え手が何を考え・感じて当事者に向き合っていたのか想像させ自由記述させる。

3回目：社会問題の当事者にとって情報の受け手はどのように捉えられているのか参考事例を紹介し、「見る倫理」について考えさせる。また、3回の授業で提示された資料をもとに、メディアの形態（画像・動画・音声・テキスト）によって情報の受け取り方がどのように異なるのか、自由記述させる。

本稿では1回目の授業の自由記述について検討する。

2) 第1回の授業内容

平成25年度の第1回目の授業ではセバスチャン・サルガドの写真集「SAHEL」から、4枚の写真を提示した¹。「SAHEL」には1970～80年代にアフリカのサヘル地方で発生した干ばつとその避難民の写真が収録されている。受講生に4人ほどのグループを作らせ、各グループにA3サイズにコピーしたモノクロ写真4枚を貸与し、敢えて何も説明せずにグループ内で閲覧させた。平成26年度は熊本県水俣市

で発生した水俣病事件の被害者を桑原史成が撮影した3枚の写真をA3サイズに拡大し、壁に掲示して自由に回覧させた²。両年度とも写真を見て感じたことや疑問をワークシートに記述させた。

平成25年度にはその後、写真家としてのサルガドの紹介と閲覧した写真のキャプション（ほとんどが撮影年と撮影地ののみ）を知らせた。また、平成26年度には、提示した桑原史成の写真の被写体の氏名や撮影年、撮影当時の年齢をまず伝え、その後、それぞれの被写体について説明した（主に水俣病事件によってそれぞれの当事者がどのような困難な状況におかれていたか）。

以上のような写真の説明のあと、平成26年には平成25年の授業で提示したサルガドの写真と同じものをプロジェクターで投影した。その上で、平成25年26年ともに、ソクタグ（2003）や今橋（2008）によるサルガドの写真に対する批判（無力な人々がキャプションのなかで名前を与えられていない。同情は的を失い、抽象的なものとなる。等）を紹介し、特に被写体の匿名性についてソクタグ（2003）や今橋（2008）の批判が妥当なものかどうか考えさせた。また、匿名性を考える上での一つの材料として、ルワンダの内戦で性的暴行を受けて望まぬ出産をした女性とその子どもの写真集『ルワンダ ジェノサイドから生まれて』（トーゴヴニク2009）の実物を提示した。幾つかの写真を教室全体に見えるよう掲げながら、添えられたキャプション（ジェノサイド発生時の状況や子どもに対する感情など。1～2ページにわたる母親からの聞き書き）を読み上げた。その上で、写真には親子の氏名が大きな活字で添えられているが、それらは実名ではなく仮名であることを明かし、以上を踏まえて「匿名性」について考えさせ記述させた。

3) 被写体の匿名性に関する論評

ここで、被写体の匿名性に関するソクタグ（2003）や今橋（2008）の論評について整理しておきたい。

ソクタグ（2003）は戦場写真など“他者の苦しみ”を撮影した写真について、撮影者、被写体となる人々、そして写真を目にする私たち個人や社会など、様々な立場に対して言及している。写真には記録としての役割と、他者に伝達するという役割の両方があるが、「美しい写真は深刻な被写体から注意を逸らし、それを媒体そのものへと向けさせ、それによって記録としての写真のステイタスを損なう」（ソクタグ2003、p.75）。そのため、「世界の悲惨（戦争の被害も含まれ

ているが、それに限定されてはいない)を撮りつづけている一人の写真家、セバスチャン・サルガドは、美しいものは偽物だというこの新たなキャンペーンの主たる標的になってきた」(ソントグ 2003、p.76)。「問題は、写真が無力な人々、無力な状態へと追いやられた人々に焦点を定めているところにある。無力な人々がキャプションのなかで名前を与えられていないのは意味深長である」(ソントグ 2003、p.77)。このように述べた後、ソントグはサルガドの写真では被写体が悲惨な状況にある集団の代表例という存在に格下げされ、あまたの悲惨がひとまとめにされていること、グローバルな規模で捉えられた被写体にたいしては、同情は的を失い、抽象的なものになることを指摘している。

今橋(2008)はソントグの論評に賛同する。「ソントグが指摘するように『あまたの悲惨をひとまとめ』にした途端に、被写体は無名の同情すべき人々へと格下げされる。見る者は、個々の悲惨の歴史的・政治的経緯を改めて分析し、その解決に参加しようという意思を、結局は無力感とともに失ってしまう」(今橋 2008、p.198)。今橋はサルガドの世界の子ども達一人一人を正面から撮ったポートレートシリーズについて、被写体の氏名が一切記載されないというあり方に疑問を呈している。

筆者は、これらの論評の意味するところを当初くみ取れかねていた。果たして社会的に困難な状況にある当事者を撮影した写真に、当事者の名前は必要なのだろうか。名前の有る無しは写真を見る者の意識にどのように作用するのだろうか。

この問いに対して授業者自身が明快な答えを用意できていなかったこともあり、授業では引用の形で上述のソントグ(2003)と今橋(2008)の指摘をそのまま受講生に示した。その上でほとんど補足的説明のないまま、「サルガドの写真にはこのような批判があるのだが、本当にそうなのだろうか?写真に当事者の実名があるのと匿名なのとで、何が異なってくるのだろうか」と受講生に投げかけた。

3. 自由記述の分析

匿名性に関する自由記述の設問は以下の通りである。

「不当な状況にある当事者についてメディアが取り上げる時、匿名であることと実名であることで何が異なってくるだろうか?当事者、メディア、情報の受け取り手それぞれの立場で考えなさい」

ここで問うているのは「当事者の匿名性(実名)」である(伝え手・受け手の匿名性ではない)。また、メディアとはメディアを通して情報を発信する伝え手を意味しており、受講生は授業の流れから、プロフェッショナルの写真家や新聞・テレビなどの報道関係者を想定している。自由記述の内容からしても、伝え手としてネット投稿者のような素人は含まれていない。

自由記述のスタイルは様々であったが記述の内容を、①当事者の立場として実名の場合(A)、匿名の場合(a) ②伝え手の立場として実名の場合(B)、匿名の場合(b) ③受け手の立場として実名の場合(C)、匿名の場合(c)の6つの条件カテゴリーに分類した。

表1~3ではカテゴリーごとに、記述の意味するところが同一と考えられるものについては整理した。記述の右には人数を示したが、ひとりが複数の異なる内容の記述をすることがある一方で、同じ単語を用いても微妙にニュアンスが異なる記述が複数の大学生から書かれていることもある。また、主語や目的語を欠いていたり、表現が簡潔すぎて意味を汲み取り兼ねたりする記述もあった。本稿では恣意的な解釈を避けるため、明らかに意味が同一と考えられる記述以外はそのまま表に掲げている。

なお、表の欄外には当事者の立場、伝え手の立場、受け手の立場それぞれについてカテゴリーに分類しにくい記述を示している(Aa,Bb,Cc)。

1) “当事者の立場からの匿名・実名”に対する意識

ここで記述されているのは、「当事者の立場からすれば、メディアで自分のことが取り上げられるとき、匿名であることと実名であることでどのように異なってくるだろうか」という大学生による推測である。約100名の受講生のうち、自分自身が社会問題の当事者としてメディアで取り上げられた経験を持つ者はほとんどいないと考えられる。

記述の中で目立ったのが、プライバシーの侵害や差別・中傷に関わる推測である(A1、A2、A3、a1、a4)。また、発言のしやすさについて匿名の場合のほうが本当のことを発言しやすいのに対し、実名の場合には言いたいことが言い辛かったり発言内容を選ぶようになったりするのではないかと、という記述がみられた(a3、A6、A9、A30)。これは実名の場合には話すことに責任を持てる(A29)むしろ責任を持たなければならぬ(A34)、と意識されていることと関わっているだろう。

表1 “当事者の立場からの匿名・実名”に対する意識

実名の場合 (人)		匿名の場合 (人)	
A 1 差別や嫌がらせ・中傷を受ける。	13	a 1 プライバシー・自分が守られる。何も起こらない。	11
A 2 周りの目が気になる	6	a 2 安心感がある	6
A 3 プライバシーや私生活が侵害される。	6	a 3 発言しやすい。本当の気持ちや心の傷を語ったり見せたりできる。	5
A 4 より自分の思いを伝えたり理解してもらおうことができるのではない か。	3	a 4 直接中傷を受ける可能性は低くなる。	2
A 5 自分が痛々しい体験をしたのだと知って貰える。	2	a 5 事実と異なる内容を含めてもいいやという気のゆるみがありそう。	1
A 6 言いたいことが言いづらい。体験全ては話せない。	2	a 6 素顔が出ないことで、自分のような人がいることを知ってもらいたい気 持ちは後押しできる。	1
A 7 周囲から注目が集まる。	2	a 7 批判から自分を守る。	1
A 8 人物が特定されやすい	2	a 8 さらしもののような形にならなくてすむ。	1
A 9 いうことを考える・選ぶようになる。	2	a 9 何か本当の自分を隠しているように感じないか？	1
A 10 さらしものにされるのではないか。	2	a 10 メディアに協力しやすい。	1
A 11 勇気がいる。	2	a 11 負担が軽くなる	1
A 12 不安になる	2	a 12 実情がどこか現実味が薄れる部分がある	1
A 13 周囲の見る目は変わるかもしれない	2	a 13 「私」ではなくその「出来事」が伝わる	1
A 14 自分の名前が知らない人に「こういう人間なんだ」という認識で覚 えられるのはイヤなこともあるのではないか。	1	a 14 不当な状況に陥った自分に仮の名前を付け、その状況から抜け出す こと、つまり本来の自分(=実名)に戻ることを望んでいるのではない か。	1
A 15 「私であること」が明確になり本当の私を見てもらうことができる。	1	a 15 匿名で自分のことを見ることで、客観的に見ることができるのではない か。	1
A 16 より現実を受け止めていかなければならない。	1		
A 17 さらに被害を受けるかもしれない。	1		
A 18 協力者がわざわざ探してかけつけるかもしれない。	1		
A 19 同情も差別もすべて受け入れなくてはならなくなる	1		
A 20 一緒に問題に向き合って欲しいという思いもあるのではないか。	1		
A 21 実在する人物であるとしらしめる。	1		
A 22 自分への批判が直接来る。	1		
A 23 不当な状況下では自分を知られたくないと思うから、精神的苦痛 が大きい。	1		
A 24 「かわいそうな人」というレッテルを貼られることを覚悟する。	1		
A 25 分からなくても良い情報まで明らかになってしまう可能性がある。	1		
A 26 何か本人に害のある出来事が起こるかもしれない。	1		
A 27 自分の顔に泥をぬること、恥をさらすことになる。	1		
A 28 良いことであれ悪いことであれ、一生残るのでこわい。	1		
A 29 自分が伝えること、話すことに責任を持てる。	1		
A 30 自分にとって都合が悪くなってしまふことは言わないようになる。	1		
A 31 当事者と同じ状況の人々が集まりやすくなる可能性が高い。	1		
A 32 リアルに伝えることができる。	1		
A 33 名前を知って貰うことによって今の状況を分かって欲しい気持ち が強い。	1		
A 34 発言時の責任が重くなる。	1		
A 35 実名をあえて出すことで「自分の体験を伝えたいんだ！」というこ とをアピールできる。	1		
A 36 本気で話す。	1		
A 38 苦しみ・悲しみを知って欲しい、この状況について考えて欲しい という気持ちが大い	1		

- Aa 1 写真を出すくらいなら私達の現状を知って欲しいという思いがあつてのことなので、名前はどちらでも良いのではないだろうか。
- Aa 2 当事者は自分がどこの誰であるかを知ってもらいたいわけではなく、今の苦しい状況を伝えたいはずだ。それはメディアにとっても同じだ。
- Aa 3 メディアに出るということは赤裸々にすべてを出す必要がある。仮名で出ることが本当に良いことなのか分からない。
- Aa 4 差別やプライバシーの侵害を避けたいのか、自分のような人々がいることを周りに認識してほしいのかで違ってくる。
- Aa 5 作品として見るのかニュースとして見るのかによって、匿名と実名を分けて欲しい。
- Aa 6 仮名で公開する意義はまったく感じない。名前は個人を象徴するものであるが、創られた名前でその人物が取り上げられた時、その人は「自分自身」ではなくなってしまうのではないか。
- Aa 7 匿名や実名どちらであつたとしても、自分たちの生活を見せ物のような扱われているような感覚を抱くのではないか。
- Aa 8 名前が使われても使われなくても良いと思っているのではないか。
- Aa 9 名前がついているほうが他人事だと思わずに深く考えることができるので、実名が無理なら偽名があつたほうが良い。

記述全体からは、自由記述の設定に対して、当事者がメディアに取り上げられることを自ら決断する主体的な存在としてイメージされていることがわかる。メディアに取り上げられる際の当事者の思いや戸惑いは第2回および第3回授業のテーマであり、今回の授業ではまったく触れていない。サルガドや桑原史成が写真の被写体である当事者にどのようにアプローチしたのか説明していないにも関わらず、あたかも匿名か実名かの選択権は当事者にあるように捉えられている。

そのように判断されるのは、当事者が何を考えてメディアに取り上げられることを決断したのか推測するような記述があるからである。「思いを伝えたり理解してもらおうことができる」(A4)、「協力者がかけつけるかもしれない」(A18)、「この状況について考えて欲しい」(A38)「不当な状況から抜け出すことを望んでいる」(a14)のように、当事者が問題の解決をめざして自分の現状を広く社会に知らしめるためにメディアに暴露する、という状況が想定されている。大学生

表2 “伝え手の立場からの匿名・実名” に対する意識

実名の場合	(人)	匿名の場合	(人)
B 1 情報の信憑性・信頼性が増す。	10	b 1 プライバシーを守ることができる。	5
B 2 その情報に対してさらに大きな責任を持つ、責任が重くなる。	6	b 2 ぼんやりと伝えることになる。曖昧になる。	3
B 3 受け取り手の興味・関心を惹きつけることができる。	5	b 3 リアリティが無くなる。	2
B 4 生々しさ・リアリティを伝えられる。	5	b 4 責任を取る必要はなくなる。	2
B 5 個人情報を取扱うので当事者への影響を考慮しなければならない。より配慮が必要。	4	b 5 情報を引き出しやすい。	2
B 6 情報の出し方がより慎重になる。丁寧になる。	4	b 6 情報が扱いやすくなる	1
B 7 本当のことをありのまま伝えようとしている。伝えやすい。	4	b 7 現実味のある匿名をつければ大体身近に感じることはできる。	1
B 8 インパクトが大きい。	4	b 8 ただの情報の一部としてしかみていない。	1
B 9 ニュースの大きさが変わってくる・話題になる	3	b 9 承諾を得ることなく伝えたいことを伝えられる。	1
B 10 より伝わりやすい。伝えやすい	3	b 10 こういう人というくり。	1
B 11 正確に詳しく情報を伝えたいために実名を出したがる。	2	b 11 個人より全体を取り上げる形になる	1
B 12 具体性を持った情報を提供できる。	2	b 12 深い内容や生々しいことも伝えられる。	1
B 13 説得力がある。	2	b 13 当事者の言った通りに公開しやすい。	1
B 14 問い合わせがきて批判を浴びる可能性が増える。	2	b 14 手を加えることで実際と違ったものを伝えてしまうこともある。	1
B 15 現実味がある。	2	b 15 本当はやらせてじゃないかという意見があるのではないか。	1
B 16 真実を伝えるときにより心に響かせることができる。	1	b 16 当事者の状況が抽象的に伝わるため、注目をしてもらうにはある程度努力が必要。	1
B 17 個々の気持ちを伝えやすい。	1	b 17 事実より現実味をもたせられるかどうか悩む	1
B 18 「この人がこういう思いをした」という人々の道徳感情に訴えかけ、記憶に残る報道ができる。	1	b 18 好きなことが報道できる。	1
B 19 他人事ではないと受け止めてもらえることを考えている。	1	b 19 取り上げやすい。	1
B 20 受け取り手への浸透速度を上げやすい。	1	b 20 当事者の心のケアをしながら真実を伝えることができる。	1
B 21 当事者が言っていないようなことを言うのを避ける。	1	b 21 本当に伝えたいことを伝えることができる。	1
B 22 制限される。	1	b 22 信憑性が損なわれる。	1
B 23 より実感を持ってその当事者のことを考えてみてほしい。	1	b 23 事実を取り上げていても曖昧になりやすい。	1
B 24 説明や情報を伝えるときに指示語が減るので説明しやすい。	1	b 24 ニュースの大きさが小さくなる	1
B 25 物語のように主役がいなくては見てもえられない、と思っているかもしれない。	1	b 25 真の不当な状況が感じられない。	1
B 26 一人一人の出来事をそれぞれ区別して分かり易く伝えられる。	1		
B 27 当事者のプライバシーをより注意する必要がある。	1		
B 28 より取り上げやすい。	1		
B 29 一人一人の深刻さを感じる。	1		
B 30 真実がより真実になる。	1		
B 31 事実を報道できる。	1		
B 32 真実がより明らかになる。	1		

Bb 1 当事者の気持ちや伝えたい内容によって匿名にすべきか実名にすべきかわ変わってくる。

Bb 2 リアリティと実際の情報を深刻に伝えるために実名を望む者と、後の責任を考えて匿名にする者の2パターンに分かれる。前者は個人、後者は組織が多く感じる。

Bb 3 匿名であっても実名であっても利益は変わらない。

Bb 4 仮名でも何かしら名をつけると話題の中で扱いやすいのではないかな。

には、プライバシーや個人情報保護に厳しい昨今、今日の社会的に困難な状況にある当事者について本人の許可無くメディアが取り上げることは無い、という前提が植え込まれているのかもしれない。

2) “伝え手の立場からの匿名・実名” に対する意識

社会問題に関する伝え手の最大手は、プロフェッショナルの写真家や新聞・テレビなどの報道関係者である。ジャーナリズムにおける取材対象者の実名報道または匿名報道については、人権問題の立場から、あるいはマスコミュニケーション研究において議論のあるところである。

「伝え手の立場からすれば、不当な状況化にある当事者をメディアが取り上げるとき、匿名であることと実名であることとどのように異なってくるだろうか」という問いかけに対する記述からは、今日の若者が報道やマスコミをどのように捉えているのか伺える。

例えば、「実名の場合は情報の信憑性や信頼性が増す」

(B1)「実名の場合は情報に対してさらに大きな責任を持つ

(B2)」という記述は、裏を返せば「当事者を匿名にした報道

は信憑性や信頼性に劣り (b22)、伝え手は責任を負わない

(b4)」と大学生が意識していることを意味する。信憑性・

信頼性という言葉は使われていないが、実名の場合は「真実

がより真実になる」(B30)「事実を報道できる」(B31)「真

実がより明らかになる」(B32)のに対して、匿名では「本当

はやらせじゃないか」(b15)のようにさえ捉えられている。

日本では少年事件の加害者については少年法に従って匿名報

道が基本である。実名でも匿名でもどのような場合であれ、

情報の正確性や公平性を損ねてはならないというのが報道倫

理であるが、大学生は匿名の場合はその倫理が守られていな

い可能性があることを危惧している。

ところで、当事者の立場からの匿名・実名の違いを推察し

表3 “受け手の立場からの匿名・実名”に対する意識

実名の場合	(人)	匿名の場合	(人)
C 1 現実味が増す。リアリティが上がる。	30	c 1 現実味が薄い。	5
C 2 その人への気持ち・情が入りやすい。	12	c 2 かわいそうなどの同情だけで終わる。	4
C 3 信じやすい。信頼性がある。	9	c 3 どこか自分とはかけ離れたことのように感じる。	3
C 4 より親近感が増す。身近に感じられる。	6	c 4 深刻に受け取れない。	2
C 5 記憶に残りやすい。	5	c 5 現実味に欠ける。	1
C 6 何か行動しようという気持ちになる。	4	c 6 フィクションのように感じてしまう。	1
C 7 差別的で一方的な見方をしてしまう場合も考えられる	3	c 7 本当に存在するのか分からず、同情心も薄れるような気がする。	1
C 8 現実起こっていることを実感しやすい。	3	c 8 匿名だからといって信頼できないわけではない。	1
C 9 実名から色々なことを調べることができる。	3	c 9 親近感がわからない。	1
C 10 より考えさせられる。	3	c 10 個人を特定する名前がない方が、より共感したりかわいそうだと思う感情が強くなる。	1
C 11 感じる部分が増える。	2	c 11 他人事のように捉える。	1
C 12 当事者達の思いをより受け取ることができる。	2	c 12 自分とどう関わっている人か分からない、縁がない人だとして無関な介入を控える。	1
C 13 より真剣に受け取る。	2	c 13 詮索することが不可能となるため、気になっても深く調べることができず、ただ同情することしかできなくなる。	1
C 14 本当に”その人がいる”ということが心に伝わる。	1	c 14 深刻にその問題に取り組もうとしない。	1
C 15 その人物は実在しフィクションではないことをまじまじと感じる。	1	c 15 何らかの感情を持つが行動には移さない場合が多い。	1
C 16 悲慘さが際立つ	1	c 16 いまいち分かりにくく気にならないかもしれない。	1
C 17 事件の痛々しさをリアルなものとして親身に受け取ることができる。	1	c 17 軽く受け流す。	1
C 18 より関心を持って見ることができる。	1	c 18 適当に見てしまう。	1
C 19 架空ではなく真実を知ることができる。	1	c 19 漠然としたイメージでしか捉えることができない。	1
C 20 より具体的に想像しやすい。	1	c 20 個人から人々というくりになり抽象的な印象を感じてしまう。	1
C 21 どんな人が(当事者)になってしまっているかがわかる	1	c 21 こういう人がいるんだな、という感じにしかならない。	1
C 22 よりその人達の声に耳を傾けようとする。	1	c 22 救あるうちのひとつとして捉える。	1
C 23 実名の場合にはより救いを求めて来ているように思える。	1	c 23 知られたくない事柄(デリケートなもの)だと感じる。	1
C 24 より当事者の感情に迫ることができる。	1	c 24 その“人”の気持ちを考えることは実名よりしにくい。	1
C 25 より同情できたりできるのではないかな。	1	c 25 メディア・当事者が伝えたいことをありのまま受け取ることができる。	1
C 26 その人について調べることができる。	1	c 26 その場所の状況が伝わる。	1
C 27 調べることが可能となり、同情することも批判することも本人に伝えること、行動することができる。	1	c 27 ひとつのことに絞りで取り上げるのではなく、多くの物に当てはめることができるのではないかな。	1
C 28 自分の生活に関わる。	1	c 28 状況を伝えることに何も影響しない。	1
C 29 名前や年齢があると被害者に自分を置き換えて考えられる。	1		
C 30 他人事としてとらえることができなくなる。	1		
C 31 当事者と状況を結びつけて考えられる。	1		
C 32 当事者を名前で呼ぶことができる。	1		
C 33 伝わってくるものは大きい。	1		
C 34 当事者に対する気持ちが変わってくる。	1		
C 35 その人の背景をどうしても見てしまい、意見が左右されやすい。	1		

- Cc 1 実名か匿名かあまり関心はない。受ける印象は変わらない。伝わるものの強さは変わらない。(3人)
- Cc 2 匿名であっても実名であっても不当状況にある人々であるから何か罪をおかしたわけではないし、その状況について理解することが主になると思う。
- Cc 3 名前があろうがなからうが、現状を見るだけの人には関係ない。当事者を救おうと寄付をする人達にとっては、実名があったほうが良いのではないかな。その後の動向をするための重要な情報になる。
- Cc 4 受け取り手としては、なぜ実名を出さないのだろうかと思う。TVなどでわざわざ仮名にする必要はないと思う。顔を出すのは覚悟があることで、匿名・仮名で自分を自分でなくしてしまうのは、その覚悟がどこかムダになってしまうのではないかな。
- Cc 5 仮名でも具体的に身近なもの・現実のものとして受け取りやすい
- Cc 6 仮名でも名前があることでその写真の中の人物に引き込まれる。(3人)
- Cc 7 仮名を付けるのならば、紛らわしい実名のような何事かは良くない。「Aさん」「Bくん」が良い。
- Cc 8 実名か仮名か確認する術はない。

た記述からは、当事者本人の意識・意欲・態度・感情などと
ともに、情報の受け手や周辺の人々との関係性についての記述
が多数を占めた (A1、A4、A7、A20、a1、a8)。これに対
して、伝え手の立場からの匿名性をめぐる記述では、実名・
匿名の場合ともに当事者に対してはプライバシーへの配慮な
どに関する記述 (B5、B6、b1) が、受け手に対しては内容
のアピールに関する記述が挙がっている (B3、B9、b16、
b24)。当事者に対して配慮しつつ、受け手をいかに惹きつ
け記憶に残る情報伝達をするか工夫をこらすメディア像が大
学生の中に認められる。

3) “受け手の立場からの匿名・実名”に対する意識

「受け手の立場からすれば、不当な状況化にある当事者を
メディアが取り上げる時、匿名であることと実名であるこ
とでどのように異なってくるだろうか」という問いかけに対
する記述は、前述の2項が「当事者や伝え手はおそらくこう
であろう」という推測に基づくのに対し、「受け手である自
分にとってはこうである」という経験や内省に依拠している。
記述に非常に多く用いられた言葉は「リアリティ」(現実、
現実味)である (C1)。実名のほうが当事者やその人が置か
れた状況にリアリティを感じ、「実名の場合のほうが信じや

すい・信頼性がある」(C3)という。だからこそ「当事者への気持ち・情が入りやすい」(C2)、「より身近に感じられる」(C4)「他人事としてとらえることができなくなる」(C30)のように共感が生まれ、「より真剣に受け取る」(C13)「何か行動しようという気持ちになる」(C6)と言えよう。

これに対して匿名の場合は、「現実味が薄い」(c1)、「どこか自分とはかけ離れたことのように感じる」(c3)、「フィクションのように感じてしまう」(c6)ため、「深刻に受け取れない」(c4)、「他人事のように捉える」(c11)、「適当に見てしまう」(c18)、「こういう人がいるんだな、という感じにしかない」(c21)。このようなとらえ方では当事者に対する共感は生まれにくいし、受け手の当事者性も獲得されにくい。結果として「深刻にその問題に取り組もうとしない」(c14)、「行動には移さない」(c15)のように、それ以上の受け手による問題への関与は生まれない。

自由記述の前にソインタグ(2003)や今橋(2008)による写真のキャプションや被写体の名前の提示に関する論評を示していたとはいうものの、そして「実名か匿名かあまり関心はない」(Cc1)、「名前があろうがなかろうが、現状を見るだけの人には関係ない(ただし、当事者を救おうとする人には実名が必要)」(Cc3)のように、実名か匿名かに意識の違いはないとする記述もあったとはいうものの、当事者の名前が情報に付されているか否かは、大学生の情報の受け取り方に大きく違いをもたらすことが示された。この理由は何か。「記憶に残りやすい」(C5)、「本当に“その人がいる”ということが心に伝わる」(C14)、「当事者を名前で呼ぶことができる」(C32)、のように、名前は一人の人間の存在が具体化したものとして私達の心や記憶に訴えかけるのかもしれない。また、「本来の自分(=実名)に戻ることを望んでいるのではないか」(a14)、「名前は個人を象徴するものであるが、創られた名前でその人物が取り上げられ時、その人は『自分自身』ではなくなってしまうのではないか」(Aa6)、「匿名・仮名で自分を自分で無くしてしまうのは…」(Cc4)のように、名前は単なる記号ではなくその人自身の象徴として、大学生達に受け止められていることが推察される。

4. おわりに

メディアにおける当事者の匿名性に対する大学生の意

識を自由記述から抽出して整理したところ、メディアに実名で取り上げられるか匿名で取り上げられるかについて、当事者が主体的に判断しているというイメージが持たれていることがわかった。情報の伝え手に対しては、実名の場合は情報の信頼性・信憑性に優れていると受け取られている。また、当事者に対して配慮しつつ、受け手をいかに惹きつけ記憶に残る情報伝達をするか工夫をこらすメディア像が大学生の中に認められる。受け手に対しては、実名のほうがリアリティを感じて感情移入がしやすく、共感が生まれやすいことがわかった。

実名やいわゆるテレビ番組などの“顔出し”のように、当事者が生の姿をさらしたほうが受け手に訴えかける力が強いことは、今更指摘するほどのことは無いのかもしれない。そして、それが多くの場合当事者にかかり心理的な負担を迫らせることも、想像に難くない。土本(2005)はドキュメンタリーの映像が当事者を傷つけるエピソードの一つとして、映画『水俣一揆 ― 一生を問う人びと ―』公開にまつわる水俣病被害者の女性の思いについて触れている。映画には加害企業チッソの社長に詰め寄って補償を訴える彼女の姿が収録されているのだが、彼女は「あの映画の上映を止めてくれ」と監督に訴えた。「彼女はここに住み、生きるうえで辱めを受けることは断固として避けたいんですね。しかし、水俣病のことを本当に知ろうとする多くの人びとの存在もまた確信しているのです。全国の支援者には自分の言葉が伝わると信じている。しかし、近所の人には伝わらないで、むしろ蔑みの対象になると恐れる」(土本 2005、p.94)。写真家や報道関係者のような伝え手は勿論、情報を受け取る私達も、実名であれ匿名であれそのような当事者の思いについて自覚的であるべきだろう。

今回分析の対象とした自由記述は、当事者の匿名性について資料や論評を提示して考えさせて書かせたものであり、大学生のような若い世代が日常的に持っている匿名性に対する意識とは乖離している可能性がある。考える機会を設けることで匿名性に対する意識がどのように深化するのか、今後の検討課題としたい。このような資料の収集・分析の積み重ねをすることで、学校教育における社会問題に対する当事者性の獲得に、どのような資料提示や授業実践が効果的なのか示唆を得ることが可能であろう。

¹ サルガド (2004) より以下の4枚。

p.11 Here, before 1973, was a large lake - Lake Faguibine, which has dried up little by little. The men have all gone - some to Libya, others to the Ivory Coast, and still others to Nigeria. Only the old people, women, and children remain, as thin and withered as the vegetation itself. Mali, 1985

p.91 Bati Camp, Ethiopia, 1984

p.115 Korem camp is situated at a very high altitude (about 8,200 feet). At night the temperature often drops to freezing. Nighttime is when the greatest number of deaths occur. Ethiopia, 1984.

p.121 Draped in blankets to keep out the cold morning wind, refugees wait outside Korem camp. Ethiopia, 1984.

² 桑原史成 (2013) より以下の4枚。ただし、p.47の写真は本来はp.46の岩蔵の顔が少し遠景に入った写真と併せた見開き写真。

p.41 私は久美子を美しく撮りたかった。5度目の水俣取材で、15歳の「人形」の瞳を被写体にできた。彼女には何が見えているのか、見えないのか 専用病棟 1966年10月

p.45 断末魔の藤吉が病室の壁をかき削った爪痕 水俣病専用病棟 1962年8月

p.47 「手を撮っていいですか」というと、レンズの前に突き出してくれた。岩蔵はこの1年3ヶ月後に全身衰弱で死亡 リハビリセンター 1970年9月

p.66 樽漕ぎも円熟して。栄子 27歳 茂道湾 1966年5月

参考文献

- 今橋映子 (2008) 『フォト・リテラシー』 中公新書
桑原史成 (2013) 『水俣事件』 藤原書店
セバスチャン・サルガド (2004) 『SAHEL - THE END OF THE ROAD -』 University of California Press
スーザン・ソントグ (2003) 『他者の苦痛へのまなざし』 みすず書房
土本典昭 (2005) 記録映画作家の“原罪”について. 原田正純編著『水俣学講義第2集』 pp. 81-112
ジョナサン・トーゴヴニク (竹内万里子訳) (2010) 『ルワンダジェノサイドから生まれて』 赤々舎